

歴史ある城跡

ふるさと全国お城サミット■プライベート

全国県人会東海地区連絡協議会、読売新聞社などをつくるふるさと全国県人会まつり実行委員会が今年秋に開催予定の「ふるさと全国お城サミット」のプライベートが9月11日、オンラインで行われた。「お城の魅力再発見」をテーマに中井均・滋賀県立大名誉教授が講演。中井さんは「何度行っても、そのたびに新しい発見がある」と城の魅力を語った。また、名古屋城調査センターの村木誠副所長と原史彦主査が名古屋城について話した。講演は動画投稿サイト「YouTube」で視聴できる。(視聴はQRコードから)

まず石垣を見よう

■信長の城郭革命

城は大きく二つの構造から成り立っている。堀や石垣など、掘立柱ではなく礎石建の普請と天守や櫓、門などの作事だ。普請は土木、作事は建築工事だ。日本の中世には3万〜4万もの城や館が築かれた。その城は土造りで、山を切り盛りして土塁や堀切を造ったり、曲輪という平坦地を造ったりした。建物は掘立柱の簡易なもので、作事はほとんど意識されなかった。こうした城造りを変えたのが織田信長だ。天正4年(1576)、近江に築いた安土城は10層を超える石垣、それまでの掘立柱ではなく礎石建の天守という高層建築物を造った。信長の城造りを、豊臣秀吉が踏襲し、その家臣らが全国各地にこうした城を造っていった。土造りで、戦うだけの軍事施設だった城が、高石垣や瓦屋根の天守を持つことで、權威のシンボルにもなった。これは「城郭革命」ともいえるものだった。

こうして城造りを変えたのが

関ヶ原の戦いを経て、30

0の藩ができ、このうち150藩ほどが城を構えた。3万から4万の城が150に淘汰され、その地域の拠点になっていった。城下町は政治、経済、文化の中心だった。武家諸法度では、新たな築城は認められず、補修する際は必ず幕府に報告することになっていった。その後も堀や石垣、土塁などの補修には届け出が必要だった。城の本質が作事ではなく、普請にあったことが分かる。

滋賀県立大名誉教授 中井均さん



なかい・ひとし 1955年大阪府生まれ。龍谷大卒。滋賀県文化財保護協会、長浜城歴史博物館館長を経て、2013年滋賀県立大人間文化学部教授。21年から同大名誉教授。専門は日本考古学で、特に中・近世城郭の研究、近世大名墓の研究。NPO法人城郭遺産による街づくり協議会理事長も務める。

■進化する石垣

城を楽しむものに、まず見てほしいのは普請だ。浜松城天守台の石垣は自然石を積んだ野面積み、彦根城や但馬竹田城などは部分的に割石を用いた打込接、江戸城は加工した石をすき間なく積んだ切込接の石垣になっている。積み方も布積み、谷積みなど時代によって変わっていった。元和元年(1615)以降、縄張りといわれる平面構造は変わらないが、石垣はどん

どん進化した。同じ城で違う積み方があれば、それは補修したところになる。岡山城の石垣は宇喜多秀家の頃は野面積み、関ヶ原後の小早川時代になると打込接、その後池田時代になると切込接に近いものになっていった。和歌山城では石材の変化が見られる。豊臣時代は紀ノ川流域の緑泥片岩が使われ、浅野時代になって和泉砂岩、紀州徳川時代には熊野の花崗班岩を使った。

天守閣が残っていない地域の方は「石垣しか残っていない」と卑下するところがあるが、石垣はその城の歴史が分かる本物。実物大の復元模型の天守閣よりも本物の石垣が残っていることを誇ってほしい。

鬼門から鬼が入ってこないようにという魔除けだ。また、城内に神社や寺院をつくることもあった。弘前城には餅神が祀られていた。秀吉の小田原攻めに参加して大名として認知された津輕家は、秀吉の木像を御神体として明治まで祀っていた。

■地域の紐帯

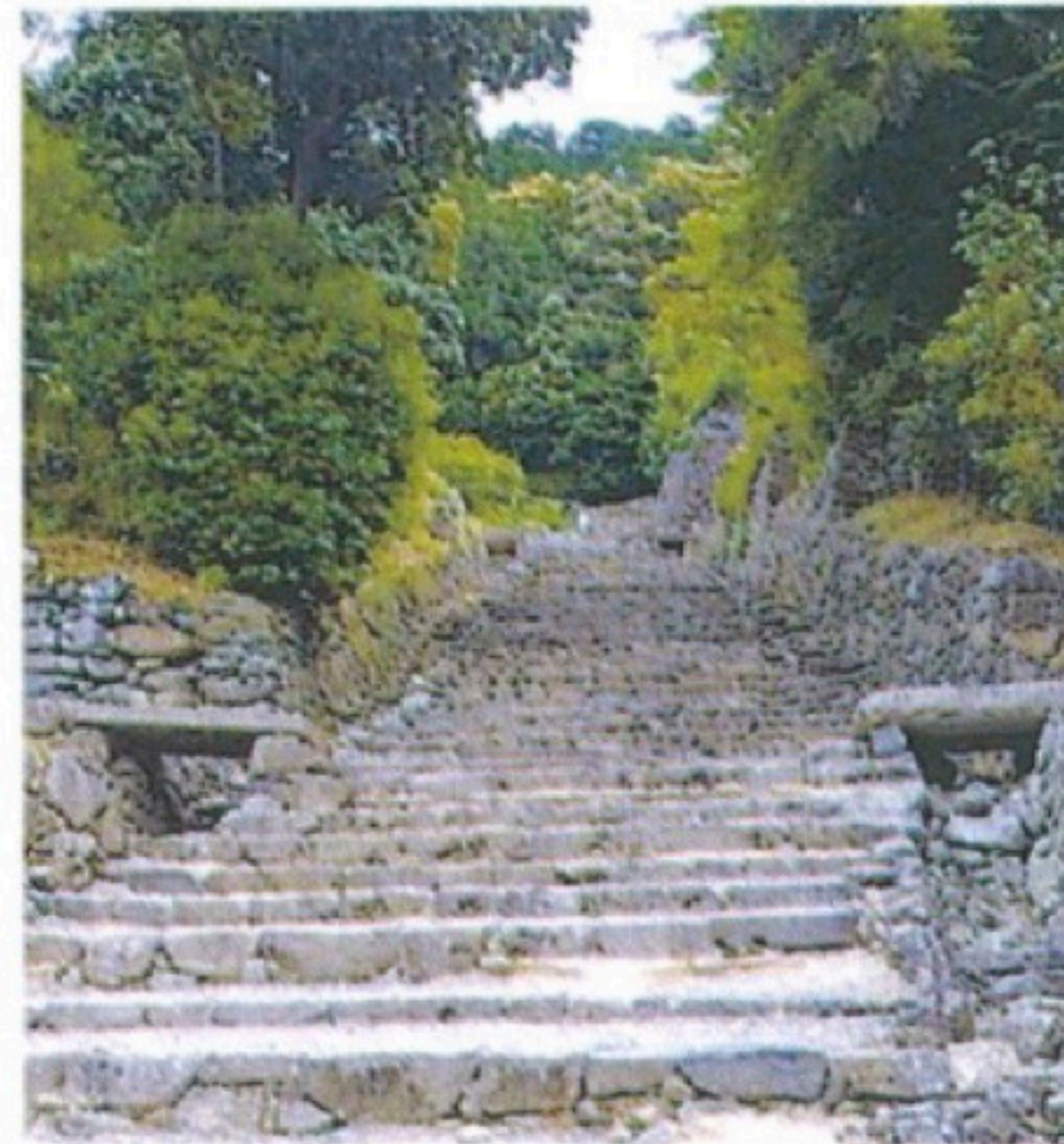
そのたびに、名古屋城の本質的価値が十分認知されていないことを痛感する。名古屋城の石垣は、天守台を担った加藤清正をはじめ20人の外様大名によって築かれた。縄張りはシンプルでありながらも、最強の防御力を誇る。天守の延べ床面積は日本最大。本丸御殿は、二条城二の丸御殿と並び武家書院造りの双壁とされる。名古屋城はまさに「近世城郭の最高峰と呼ぶにふさわしい城だ」と、僕は名古屋市民として声を大にして自慢したい。

中井均先生の講演では、さまざまな角度からの「城の楽しみ方」が紹介された。城は勉強すればするほど、奥が深い。誰が、なぜ、何のために、その場所に城を築いたのか。歴史的な背景や戦略に思いを馳せながら城を見れば、その城の意味や周辺の城との関係性も見えてくる。時代や地域性、城づくりに関わった武将たちの知恵と工夫、技術力の違いを見比べるのも面白い。これだから城めぐりはやめられない。

全国には150の城跡があり、そこはそれぞれの地域の政治、経済、文化の中心であったし、今も中心であり続けている。それは郷土愛の醸成にもつながっている。江戸時代が260年、明治以降も150年を超えている。城跡という向かい合っているのか。そこに暮らす人たちの紐帯として、街の核として活用してもらいたい。



写真左上から時計回り
犬山城天守最上階の壁に取り付けられた花頭窓の枠、信長が築いた安土城の大手道、切込接と打込接の石垣が見られる金沢城石川門、鹿兒島城の石垣で見られる隅欠



やめられない城めぐり

城を好きになったのは、高校生ごろ。「サムライ」に興味を持っていた僕は、彼らが築き上げた美しい建築物・天守に興味を持った。調べてみると、江戸時代から残る現存天守は全国に12しかないことを知った。

栗美

だとすると、他の天守は、いったい何なのか。そこから僕の城への探究心は高まった。そして城の魅力や素晴らしさは天守だけではなく、城の周囲に感じられる。城は、戦いの時代を駆け抜けた「サムライ」たちの知恵と工夫がたっぷり詰まった軍事施設。天守は城の「目」の部分ではないのだ。それに気づいてから

は、土造りの城、天守のない城へ行くことも断然楽しくなってきた。今回の「ふるさと全国お城サミット」の講演では、お二人の先生から名古屋城についての貴重な話を伺うことができた。名古屋城の本質的価値、整備と活用は、これからの名古屋城にとって重要な課題だ。「好きな城は？」と聞かれると、僕は必ず「名古屋城」と答えるが、多くの場合「え？ コンクリート復元でエレベーターがついた城なの？」と聞き返される。

貴重な記録が数多く残る名古屋城は、本格的な復元が可能な日本でも数少ない城だ。天守の木造復元だけではなく、本丸全体の復元が行われれば名古屋城の本質的価値が目までわかる

よくなる。その姿を一日も早く見てみたい。中井均先生の講演では、さまざまな角度からの「城の楽しみ方」が紹介された。城は勉強すればするほど、奥が深い。誰が、なぜ、何のために、その場所に城を築いたのか。歴史的な背景や戦略に思いを馳せながら城を見れば、その城の意味や周辺の城との関係性も見えてくる。時代や地域性、城づくりに関わった武将たちの知恵と工夫、技術力の違いを見比べるのも面白い。これだから城めぐりはやめられない。

城は僕らの住むまちのシンボルであり、ルーツでもあるはずだ。過去の遺産とせず、未来へと大切に語り継いでいきたい。



クリス・ケレン オーストラリア出身。54歳。名古屋在住。ZIP-1FM「RADIO ORBIT」(毎週日曜午前10時〜午後1時)でDJを務めるほか、テレビプレゼンター、ナレーターとして活躍。全国500か所以上、名古屋城には800回以上訪れている。城に関する講演やガイドツアーも人気で、城や戦国史に関する執筆や翻訳、英語コンテンツ監修も多数。

全国県人会東海地区連絡協議会東海地方で活動する38の道県人会が加盟している。県人会相互の連携を深めようと、1978年に設立された。各道県人会の会員数を合わせると1万5000人になる。古里の特産品を販売したり、伝統芸能を披露したりする「ふるさと全国県人会まつり」

は同協議会の最大イベントになっている。また、各道県人会の役員は愛知県から「愛知ふるさと大使」を委嘱され、古里と愛知県の懸け橋としても活動する。名古屋滋賀県人会の三久保角男会長、東海山形県人会の今田正則会長が代表幹事を務める。